

会員著書紹介 奥島 透 「日本一小さな航空会社の大きな奇跡の物語」

ダイヤモンド社(2016)、学研(2021)+Kindle版もあり

吉田英生 (1978/S53卒)



秋山雅義さん(1972卒)から、黒木亮著「島のエアライン(上・下)」(毎日新聞社、単行本2018、文庫本2021)が同期の間で話題になっているという話を最近教えていただきました。というのも話題の会社は天草エアラインで、その中心人物が元社長の奥島透さん(1972卒)だったからです。黒木さんの書は実名での小説ですが、そのベースとなっているのが奥島さんご自身による本書で、崖っぷちから立ち直った経営の書

としてとても興味深いだけでなく、爽やかな読後感もあります。筆者も本書を手取るや途中でやめられなくなり、一気に2時間ほどで読了してしまいました。

奥島さんは元は日本航空勤務、熊本支店長なども経て、最後はJAL航空機整備成田(現在のJALエンジニアリング)の社長を務めて2007年に59歳でご退職。その後2年間(ご当人の表現で)スローペースの仕事をしていたところ、突然舞い込んだ「間違いなく経営破たんすると考えていた」天草エアラインの社長への誘いを、1日考えて受諾したことで、この奇跡の物語は始まります。



天草エアラインは1998年、熊本県、天草市、上天草市、苓北町、地元企業が出資して創設された第三セクターの日本一小さい航空会社です。社長就任当時の機体はボンバルディア製のダッシュ8(39人乗り)1機のみ。故障に備えてスタンバイ機を持つためには、経営上の理由から最低でも20機を保有する必要があるという厳しい条件の中で、この1機でやりくりする大変さは申すまでもありません。かつ、天草諸島は九州本土から五つの橋で結ばれているがゆえに離島扱いされず、離島補助を受けられないといったさらに厳しい条件も課せられています。



奥島さんの社長在任期間は2009年6月28日から2014年6月27日までの5年間です。本書では「第3章 試行錯誤の1年目」、「第4章 苦難と逆風の2年目」、「第5章 予想を超えた3年目からの飛躍」となっていて、「第6章 会社再建で学んだこと」で結びとなります。もちろんどの章も読み応えがあるのですが、筆者はまず第3章で大いに引き込まれました。筆者の駄文ではなく、ぜひとも奥島さんの原文を味わっていただきたいと思いますので、詳細は省略させていただくかわりに第3章の目次を以下に引用して、内容に期待していただきましょう。

観光バスのような機内／初入社と社内の閉塞感／就任早々に手痛い失敗／社長室の壁を撤去／砂浜でのバーベキュー大会／率先垂範の大切さ／ミスの原因分析と対策を徹底／機内を掃除するパイロット／毎日唱和する安全憲章／安全への三つの取り組み／安全を最優先する勇気／態度で示す整備士たちへの感謝／大胆な人事異動／社員たちの目覚ましい成長／新予約システムの導入と営業強化



先ほど“「第6章 会社再建で学んだこと」で結びとなります”と表現しましたが、実は天草と天草エアラインを愛する奥島さんの本当の結びは「あとがきにかえて——天草への誘い」です。「読者のみなさん、ぜひ魅力あふれる天草へおいでください。その際には、天草エアラインのご利用を心よりお待ちしております！」



同書p.189からご許可をいただいて転載